

左京三条三坊・東二坊大路の調査

—第178-7次

1 はじめに

調査は、法花寺町地内の農水路改修にともなうもので、第173-1次調査地（2012年度）に隣接する南側である（図Ⅱ-30）。農水路が東二坊大路東側溝の推定地に重なっており、今調査においても検出が期待された。調査区は、水路設定予定心から、東西それぞれ1.50mの広さで設定した。また、東西計7ヵ所の拡張区を設けて条坊側溝の延長を確認した。調査面積は400㎡である。

2 検出遺構

調査地内の基本土層は、①現耕作土、②旧耕作土、③水路の堆積、④条坊側溝の埋土、⑤飛鳥時代以前の堆積土の5層である。現水路により遺構面が失われている部分が多いため、拡張区1～7を設定して、広がりを確認しつつ調査をおこなった（図Ⅱ-31・32）。

土坑SK11210 拡張区1西端で検出した土坑である。一部分がみえているだけであり全体の平面形は不明である。調査区内での径は1.00m、深さ0.80mである。古墳時代前期の土器が出土した。

南北溝SD11211 上述の土坑SK11210の東側を壊しており、南北溝SD11212に東肩を壊されている。幅は残存幅で1.60m、深さは0.30mである。

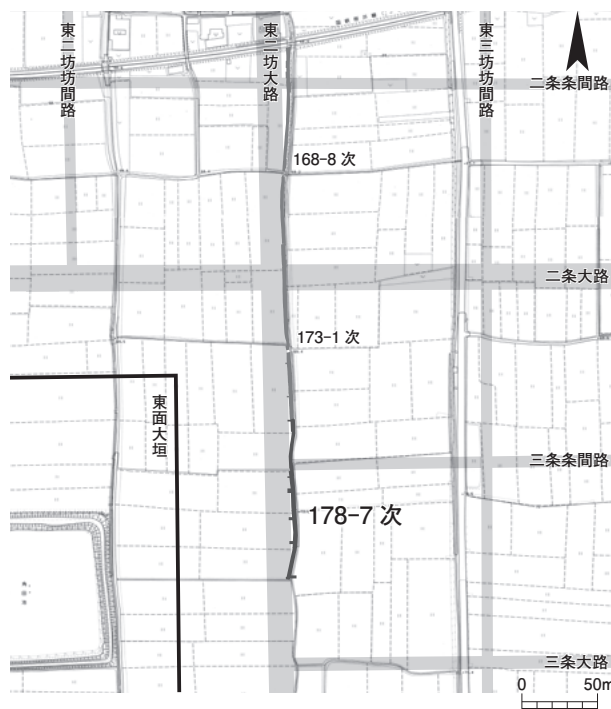
南北溝SD11212 拡張区1・4～7区および調査区の壁面で確認した。両肩を確認することができた拡張区6では、幅1.70m、深さ0.30mとなる。拡張区1・4・5では、東側が現水路で壊されている。

この南北溝は、東二坊大路東側溝であると判断される。

また拡張区7は三条条間路が想定される位置の東側に0.50×9.00mの範囲で設定した。ここから南北溝SD11212の東肩を確認できたが、三条条間路の南北側溝は調査区外に位置し、検出できなかった。

土坑SK11213 拡張区6で確認した土坑である。西半は現水路によって壊されており、南北長1.00m、深さ0.25mである。弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土している。

（南部裕樹）



図Ⅱ-30 第178-7次調査区位置図 1:5000



図Ⅱ-31 第178-7次調査区全景（北から）

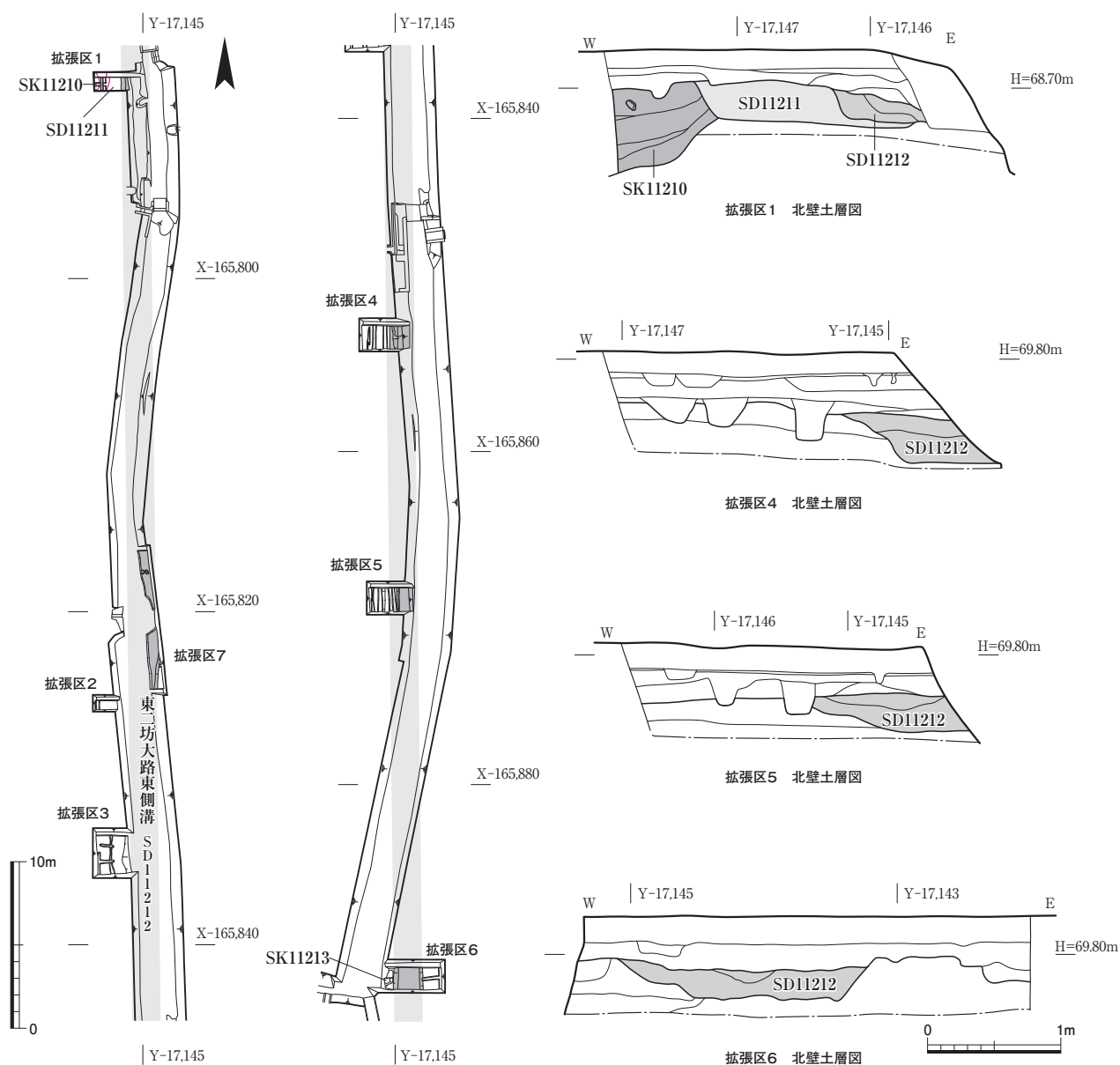


図 II-32 第178-7次調査区遺構図 1:400・土層図 1:50

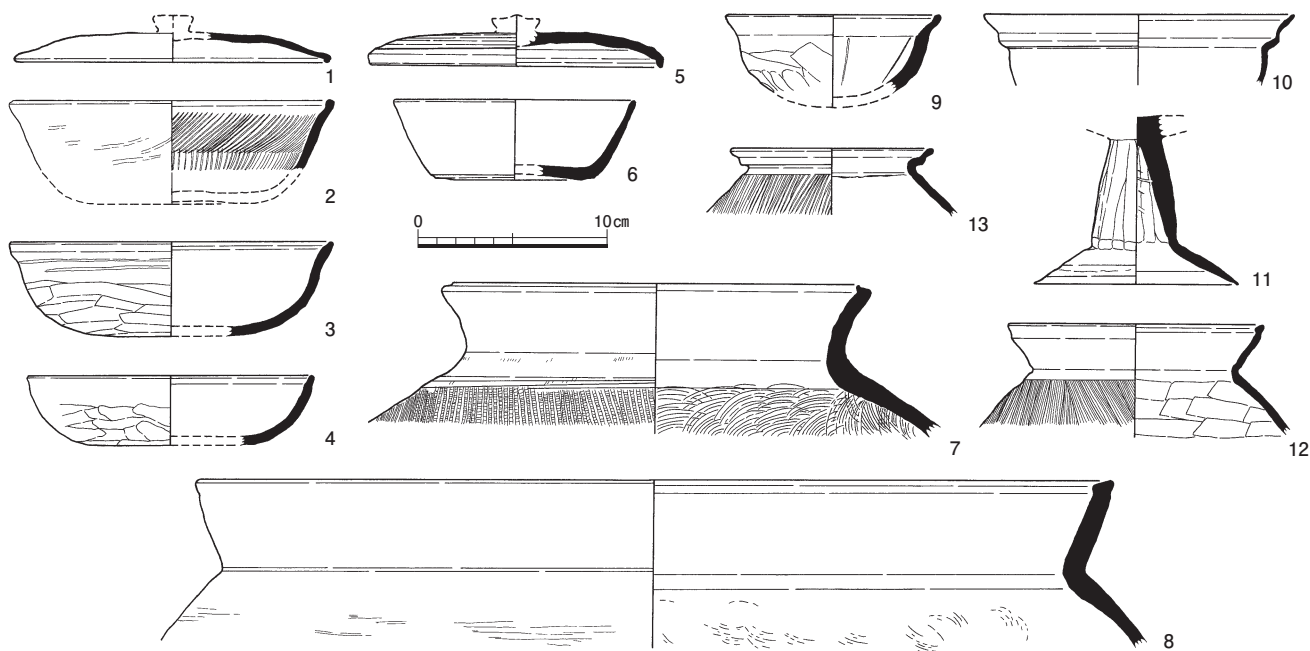
3 出土遺物

土 器 本調査区から出土した土器は、整理用木箱3箱で、古墳時代の土師器と古代の土師器、須恵器を主体とする(図II-33)。以下、南北溝SD11212および土坑SK11210出土の土器について報告する。

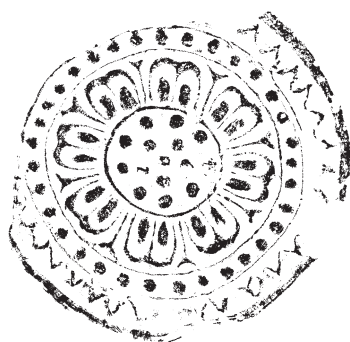
南北溝SD11212出土土器 土師器は、杯A、杯B、杯B蓋、杯H、杯、甕などがある。2・3は杯Aで、2は内面に二段放射状暗文を施す。外面は磨滅が著しいが、ミガキを施しているものと思われる。3はb1手法で調整する。内面は磨滅が著しく、暗文の有無は判然としない。復元口径は17.0cm、器高は5.0cm、径高指数は29.4である。口縁端部の巻き込みが見られないが、器形上の特徴から

杯Aに含めた。1は杯B蓋。内外面ともにヨコナデ調整。ただし、ミガキの有無は不明。4は杯で、b0手法で調整し、暗文は施さない。SD2300出土土器で杯Zとされているものに似る¹⁾。

須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、鉢F、甕A、甕Cなどがある。6は杯A。口縁部はロクロナデ、底部外面はロクロケズリで調整する。また、口縁部外面から内面全体にかけて、自然釉が降着する。5は杯B蓋で、かえりをもたない。外面はロクロケズリで調整し、自然釉が降着する。7は甕A。外面に格子目文タタキ目、内面に同心円文の当具痕を残す。8は甕C。内外面ともにタタキ目、当具痕の大部分をナデ消す。これらの土器は、土師器杯Aや須恵器杯B蓋の特徴より、藤原宮期(飛鳥V)



図Ⅱ-33 第178-7次調査出土土器 1:4 (1~8:SD11212 9~13:SK11210)



図Ⅱ-34 第178-7次調査出土軒瓦 1:4

表Ⅱ-6 東二坊大路東側溝心座標一覧

調査	遺構	X	Y
178-7次	三条 SD11212	-165,891.00	-17,144.20
75-13次	四条 SD8310	-166,063.00	-17,141.85
178-3次	五条 SD11190	-166,339.80	-17,138.00
74次	七条 SD249	-166,965.00	-17,126.00

に属すると考えられる。

土坑SK11210出土土器 全て土師器である。9・10は小形丸底鉢。9は単口縁で、器壁は厚く、粗製である。口縁部は内外面ともにナデ、胴部は外面上半をヘラケズリ、下半をユビオサエ、内面を板ナデにより調整する。10は有段口縁で、器壁が薄く、精製品である。内外面はナデにより調整するが、外面には光沢があり、ミガキによるものである可能性もある。11は高杯の脚部。脚部の外面を縦方向のヘラケズリで調整するが、ミガキは確認できない。ケズリの稜線は比較的明瞭に残る。12は布留式甕である。口縁部はわずかに内彎しながら外方へ延びる。胴部外面はタテハケ、内面は横方向のヘラケズリで

調整する。13は東海系のS字口縁甕である。口縁部に刺突文を施さず、口縁部から肩部にかけて内面はなだらかに屈曲する。これらの土器は有段口縁鉢を含むことや、S字口縁甕が廻間Ⅱ～Ⅲ式の特徴を有することから、古墳時代前期に属するものと考えられる。 (大澤正吾)

瓦 類 瓦は調査区内から軒丸瓦が2点、軒平瓦が1点、その他に丸瓦24点 (2.86kg)、平瓦が65点 (4.35kg) 出土した。軒丸瓦は6276Gが2点 (図Ⅱ-34は南北溝SD11212出土)、軒平瓦は重弧文が1点である。

4 まとめ

これまでの調査で、東二坊大路東側溝の両肩を確認できているのは合計4ヵ所であり、それぞれの溝心の世界測地系に換算した座標値を表Ⅱ-6に掲載した。回帰分析によって導きだされる方程式は

$$Y = -\tan 0^\circ 58' 48.1'' X - 19,982.55$$

である。相関係数は0.99667、残差分散は0.65325であり、1 kmを超える長さではほぼ直線とみて差し支えない。

今年度の全長約100mにわたる調査で東二坊大路東側溝を確認したことで、今後の調査に向け信頼性の高いデータを得ることができた。 (南部)

註

- 1) 「藤原宮東面内濠SD2300出土土器(1)―第24次調査から」『紀要 2012』。